

# 白山麓石川県白峰村河内のオウギ採り—焼畑民の薬用高山植物採取—

橘 礼 吉

## COLLECTING OF "ORGUI" WILD HERBS IN DEEP MOUNTAINS

Reikichi TATIBANA

### まえがき—表題の意味—

**オウギとの出会い** 焼畑農耕調査の際、作物を野生動物から守るため番小屋シゴヤを建て宿泊していた実態を聞き取った。この小屋の大きさが小さく素朴な状況を指す時、「オウギ小屋のような」という例え言葉を使っていたとの教示を受けた。これがオウギとの最初の出会いである。そして当然の帰結として、「オウギ小屋」とは、一体何を目的とした小屋なのか、白山のどの場所に建てていたのか等の教示を受けていくことになる。

結論的には、焼畑民が獣害予防の小屋を建てる技術で、森林限界付近に小屋を作って寝泊まりし、マメ科の高山植物、オウギの根を採取、和漢方薬の生薬として石川県金沢市や福井県勝山市へ出荷し、幾ばくかの現金を稼いでいた実態が分かってきた。この報告は、尾口村尾添では体験者の生存がなかったので、文献や口頭伝承でその痕跡を探り、白峰村河内では体験者の貴重な口述をもとに、亜高山帯の岩場での高山植物採取で現金を稼いでいたという稀有な焼畑民の生業活動をまとめたものである。

**文献に見るオウギ** オウギの漢字表記は、黄耆・黄耆・黄芪等の例を見る。『白山草木志』には、オウギの形質に関する植物学的記述がある。これは紀伊藩の著名な本草学者畔田伴存（1792～1859）の著述である。彼が白山に採薬登山したのは文政5年（1822）6月下旬から7月上旬（旧暦）のことで、紀行文の文末には「文政年間に所記なり」と書いている。著述は上下巻の二冊で、内容は博物誌と紀行文に大別できる。上巻は、薬部と苔部を記す。草部の最初は、なんと「白山黄耆」である。草部では50数種の植物名をあげ、その細部にわたって描写している。その

最初に白山黄耆をとりあげていることは、江戸時代文政期には生薬としての白山産オウギが、全国的に知れわたっていたことを如実に物語っている。

まず書き出しは、「白山天嶺ニ多シ土人此草ヲ採テ山畑ニ作り今世上ニ商フ／苗高サ二三尺茎円ク葉互生ス／一葉ニ二十三五ノ小葉排ス／幅二分許本潤ク末細ク文脈雞眼草ニ似テ鮮明也…」に始まり、葉・茎・花・実の特色を精密な描写文体でつづり、終わりに「本草啓蒙ニ白山黄耆富士黄耆ヲ一物トス／甚杜撰ナリ」と書き、従来は白山と富士山のオウギを同一視しているのはずさんで、その実の形が違っていると指摘し、二つのオウギの莢のスケッチをあげて説明している。花については、淡黄色と白色のものがあると記録している。

畔田が白山黄耆と命名して紹介したものの実態は、清水・古池（1992）、梅（1996）等によれば、マメ科の高山植物イワオウギ（タテヤマオウギ）であると思われる。畔田の著述で注目すべき表現に「土人此草ヲ採テ山畑ニ作り」がある。補足すれば、高山植物のイワオウギを根ごと採取し、それを山畑すなわち焼畑に移植して育て商いをしてきた事実の説明である。畔田が「土人」としたのは、現在の市ノ瀬付近の地元の人と推察するが、このオウギの焼畑栽培については、聞き取り調査では確認できなかった。

**イワオウギとは** オウギの採取場所は殆ど岩場であったというから、イワオウギに間違いのないなろう。イワオウギは別名タテヤマオウギともいう。この名称は、越中では古くから製薬・売薬業が盛んであったので、生薬として立山採取のオウギが多く利用されていたことを裏付けている。清水（1982）によれば、イワオウギはマメ科のイワオウギ属に属し、



写真1 岩場のイワオウギ (清水建美氏提供)

高さは10~80cm, 花は黄白色(淡黄色), 高山帯の砂礫地や岩場に自生する。分布は北海道・本州の東北~中部地方, さらにシベリア・朝鮮半島・中国東北部~四川にもひろがっている。

採取者によると, 大雨が降った時, 水源地域より市ノ瀬付近の河川敷に流れつくことがある。これは, 水源地域の土砂崩れが原因で, 茎が約1尺(約30cm)の時は根も1尺程あり, 根の長さは茎の長さとはほぼ同じという。採取者は, 黄色の花をつけるオウギは採ったが, 白色の花をつけるオウギは根が細く小さいので採らなかつたという。採取時期の秋は, 花期はとくに終わっているから, 黄色の花の実はどうな莢をつけるのかを理解していなければならない。だから, 実の特色を把握しその花が黄色か白色かを判断していたと推察する。採取者が黄色の花としたのは, イワオウギの外, タイツリオウギも該当する。そして白色の花としたのは, 何オウギであるかわからない。「白山植物目録」には, イワオウギ, タイツリオウギ以外は記載されていない。

**白峰村河内**とは オウギ採取についての体験を聞き取り調査できたのは, 白峰村でも河内の焼畑民に限られていた。政府刊行の地形図にも「河内」という地名は記載されていない。河内とは, 端的には谷奥の平地を意味する地形語彙である。厳密には牛首川右岸では宮谷, 左岸では小三谷より上流域, すなわち二つの谷より岐阜・福井県境分水嶺までの山地領域が「河内」で, かつては市ノ瀬・赤岩・三ツ谷の



写真2 イワオウギの莢 (清水建美氏提供)

焼畑出作り群があり, まとめてこれら出作り群を「河内三ヶ」とよんでいた。河内の戸数は, 享保17年(1730)43戸(『白峰村史』下巻による), 天保4年(1833)35戸(『続白山記行』による), 明治末(1910年代)41戸, 昭和9年(1934)45戸で, ほぼ約40戸くらいの焼畑出作りがあった。勿論夏も冬も永住していた。赤岩・三ツ谷は高度経済成長期に廃絶し, 現在は, 夏期, 市ノ瀬に登山者向きの旅館, 砂防工事・国立公園管理の事務所が開設されるに過ぎず, 冬季間は無人地域となっている。かつての河内三ヶの生業は, 焼畑でヒエ, アワ・ダイズ・アズキ等の食糧を自給し, 農閑期にはブナ林に出向いてコシキ(除雪板)や鋤の柄等の木製品を作り, また自生桧より桧笠作りの原木を採取し, さらには亜高山帯に登り, オウギの根の採取等をおこなって現金収入としていた。紹介する「河内のオウギ採り」とは, 白山麓の最奥地, 換言すれば手取川源流の最奥居住地の焼畑民が, 白山の高山植物を採取, それを現金化していた実態の報告である。

### イワオウギ採取の実態

**文献に見るイワオウギ採取** 加賀藩の儒学者金子有斐(号は鶴村, 1759~1840)は, 文政7年(1824)『白巖図解』を尾添村民喜兵衛, 十左衛門, 源兵衛, 弥兵衛等よりの聞き取りをもとに加賀禅定道と山麓村民の様子を地誌風に書いた。オウギの採取については次のように記録した。

此千翠せんすいのはなの下たを俗におもれ谷と言。石壁千尺手を立たる如し。其岩壁の間に黄薔を生す。白山麓の民此を採て業とする者住々あり。黄薔は岩壁の内へ一二尺根を含めて生する者故に採る者巖に取付て遥につたい上り, 片手にて岩角を握りて

片手に斧づると言ものを持ち岩を打碎て黄耆をとるに、誤て我が履む所の岩碎て谷底へ落て形骸皆碎粉となる者年に一人二人無き事なし。然れども夫にも不<sup>こりず</sup>懲年々採之やむ事なし。誠に世を渡る業ほど哀れなるものはなし。かく身命に懸る危き業をなさずとも外に口糊のよすがも可有と余所の見る目には思はれ侍れど、此を仕来りたる者は此より外にすべき業なく、一日怠れば一日飢る事故に吾身につけ妻子につけ、かく危き世わたりをする事也。

オウギ採取場所として「千翠のはな」下に位置する「おもれ谷」の地名をあげている。現在の猟師集団が伝承している小地名には、「センスイのハナ」「オモレ谷」という該当地名は存在せず、これは「オセンスイのマブ」「オモリ谷」の間違いであると指摘している(尾添・北村秀一氏談, 1997)。オセンスイ(御泉水)のマブの位置は、美女坂を登り切った独立標高点1,968m東側、タチヤのオモ谷に向かっての斜面急変地点である。金子が記したオモレ谷は、猟師がいうオモリ谷のことで、オモリ谷は独立標高点より丸石谷へ落ち込んでいる急谷で、上部は地形図によると急崖・岩場となっている。ともかく、江戸時代

文政期に、尾添村民が丸石谷の支谷、オモリ谷でオウギを採っていた事実が記録されており貴重である。

さらに、岩場にへばりついてオウギを採取している様子を「攀躋於巖壁採黄耆」という漢文調題目をつけて挿絵で描いている。金子は、尾添村民からの聞き取り情報をもとに、作業状態を想像して描いたに相違いない。村民2人が、垂直状岩場で、短い鶴首状のとびを持ち根を掘っている。その傍には、誇張気味にオーバハング状の岩壁を描く。この挿絵より、オウギ採りは非常に危険度の大きい作業であることが理解できる。そして本文では、命の危険を侵してオウギ採りをしなければならない山人に、素直に同情する気持ちを書いている。江戸時代、稲作民の作業を描いた農耕図絵は多くあるが、山村民の作業を描いたものはないに等しい。この意味で、オウギ採集の作業を描いた挿絵は貴重資料と言えよう。**尾口村尾添のオウギ採り—平次郎壁・夏至の壁—**1982年尾口村史調査時、オウギ採取の体験者は確認できなかった。ただ、上田太市氏(明治45年生, 1982年調査)より平次郎のオウギ採り伝説を聞いた。その概要は次のとおりである。

昔、ナカネ(新岩間温泉山崎旅館より<sup>しも</sup>下の方)にかけての緩傾斜地)に出作りが数戸あり、平次郎家はその1戸である。平次郎は中の川の壁を渡り歩いてオウギを採っていた。なにやら大きな軒が聞こえたので、誰かオウギ採りにきて昼寝しているのかと不思議に思って軒の聞こえる岩壁にいくと、岩棚で大蛇がとぐろを巻いて寝ており、その岩棚の下にオウギが群生しているのに出くわした。平次郎はオウギを採りたい一心で、50貫の大岩をかつぎ、岩棚におおいかぶさっている松の木に登り、大岩を大蛇の上に落として殺しオウギを採った。この壁は平次郎壁というが、自分はどこか知らない。

季節はずれの雪やあられが降ると、年寄り「ナカネの平次郎が山で悪いことをしたので山の神さんが怒ったからだ。」と言っていた。

オウギ取りは危険をとまなう仕事なので、すべての村人がおこなっていたのではなく、狩猟と同じように、仕事にむいている人、山を知りつくしている人がおこなっていた。この伝説は、平次郎という優れたオウギ採取者がいたことを物語る一資料として注目したい。

北村秀一氏(大正15年生, 1997年調査)によれば、

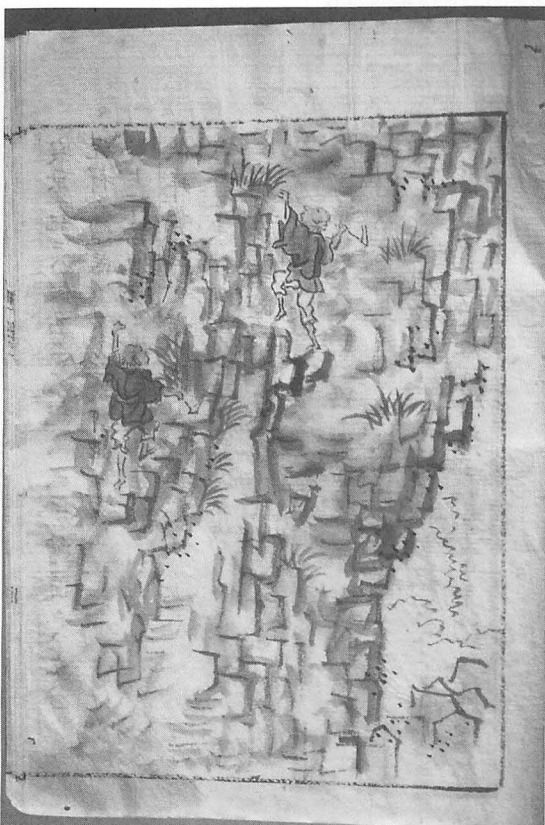


写真3 丸石谷オモリ谷でオウギをとる尾添の人  
(『白嶽図解』石川県立図書館蔵より)



中の川左岸に位置する熊の獵場は、噴泉塔よりの上流部では、坊主壁(是倉壁ともいう)、ロゾロ、奥ゾロと続き、奥ゾロで捕りそこねた熊は夏至の壁に逃げこむが、この岩場は危険で狩をしなかったという。夏至の壁という特色的地名は、尾添在住の夏至家(現当主一嗣氏、民宿旅館経営)の祖先が、オウギ採集中墜落死したのがその由来であるという。現当主は、この地名に関して全く情報を持ちあわせていないとの事なので、事故は江戸時代中期頃でないかと推察する。

人名の付いた山地地名は、個人の歴史的業績を記念して命名する場合が多い。夏至の壁は、生業活動中の事故死を命名由来としている。補足すれば、人名地名は名誉を顕彰する事例が多いが、夏至の壁は不名誉・負の意味あいが強い。負・不名誉起源の地名をつけることでオウギ採りや熊狩での事故死を未然に防ぐことを意図したのでないかと思う。この壁は、2万5千分の1地形図で説明すると、薬師山東側独立標高点1,699mを水源とする支谷にある。壁の最高部は約1,350mで、落差は350m程、勿論地名表記はされていない。



写真4 中ノ川夏至の壁と思われる岩場(今村道往氏提供)

尾添では大正末期にオウギ体験者はいなかったが、採取場所として丸石谷ではオモリ谷は記録で、中ノ川では夏至の壁、平次郎壁が地名で、住時の痕跡をとどめている。

**白峰村河内の実態** オウギの採取体験者は、河内三ヶが廃絶していたこともあり少なく、加藤勇京氏(明治29年生、赤岩)、加藤 岨氏(明治34年生、市ノ瀬)、加藤喜八氏(明治13生、三ツ谷)の3名で、採取体験はないが情報提供者は永井辰若氏(明治18年生、三ツ谷)、林七蔵氏(明治37年生、三ツ谷)、長坂吉之助(明治28年生、苛原)の3名で、いずれも1972年に調査をした。長坂氏を除いては故人となられた方々である。

1. いつの時代、いつの季節に採っていたのか 加藤喜八氏は、若い時人に雇われて数回いったとしているので、時代は明治30年代と考えられる。三ツ谷には林七蔵家が萬屋よろずの商業活動をしていたので、雇われ先は林家かも知れない。加藤勇京氏は、兵隊(満20才で兵役の義務)にいく前、父、祖父の3人で5年間続けていき、兵隊より帰ってからはいかなかったというから、明治時代末より大正時代初期にかけ



写真5 中ノ川ゾロ谷出合より玄徳壁を望む(今村道往氏提供)



ての体験となる。加藤 岬氏は、久司仁吉（明治29年生、赤岩）氏と一緒にいったことが数回、さらに加藤家は旅館を営んでいたこともあって、久司氏に宿泊用食料（米・味噌、焼畑民は雑穀を自家栽培したが、稲はまったく栽培せず米は貴重であった）を前貸しして、オウギ採取量で清算する方式で採取したのが数回あり、両方数えても10回未満であったというから、最終採取は大正末期か昭和初期頃ではないかと推察する。加藤 岬氏によれば、続けていく年もあれば、そうでなしにオウギ価格が安い年にはいかなかったという。

季節的には、雑穀（ヒエ・アワ・マメ）の収穫・脱穀が終る頃、いわゆる農繁期のめどがついた頃というから、10月上旬（年によっては9月下旬）であろう。その頃より、少人数で採取する。危険をとまなう仕事なので、親子2世代の2人、時には3世代の3人であった。最大人数4人で、これは後述するオウギ小屋の広さとも関連する。身内でないときは親戚、または猟師仲間等でグループを作った。日数は、出入りを含めて1週間～10日間位で、現地で材料を調達して仮設小屋を建て寝泊まりした。この期間の途中で、急に降雪に見舞われ、その積雪が多く、普通のワラジで歩けないことが起こる。このような時は、積雪期用履物（ユキワラジ・ズンボロ・キビスアテ等）を準備していないので、迎えに来てもらわねばならない事が発生する。だから、オウギ小屋建設予定地は、家族に出発時予告しておかなければならない。

**2. オウギ小屋を作る** 最初にオウギ小屋を作る。飯料水、オウギの洗浄水等水の便が良い場所を選定する。トガ（アオモリトドマツ）、カンバ（ダケカンバ）等を利用するため、森林限界の最高部となる。トガ・カンバで合掌を組み、屋根を直接地面においた型式である。間口約1間、奥行最大1間半位の規模で建て、中央部にジロ（いろり）を作る。屋根や床、妻側には、採取した樹木の枝葉やササ（チシマザサ）を充当する。出入口は尾口村深瀬産の桧笠で最大のオオガサを持っていき、戸代りに使用した。仮設だから隙間が多く、タツミカゼやエッチュウゴシの強風が吹くと、隙間風に見舞われ、寒気で眠れなかったという。

中央部のジロ両側に、高さ2尺位の棒を立並べて横木を渡し、その横木に縄を張って根の乾燥場とする。就寝時には冬用の綿入れをはおり、ワタボウシ（真綿製防寒衣）をつけた。夜間は、根の乾燥と暖

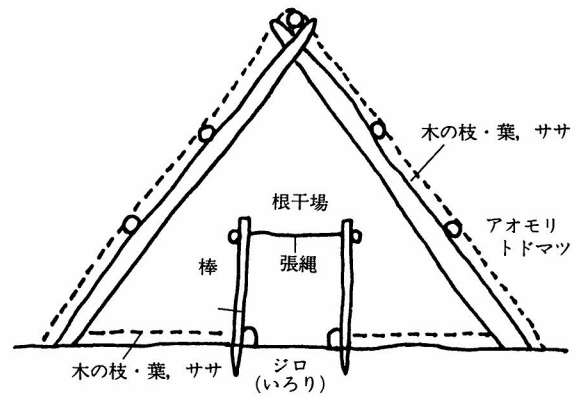


図1 オウギ小屋の構造（正面）

房を兼ねてジロに火を絶やさなかったので比較的暖かかったという。強風が吹くときは火を焚けず、寒気を防げず眠れなかったわけである。小屋は、森林限界最上限に立地するため、採取地との隔たりが遠くなり、20町（約2km）以上離れていた事があったという。

**3. 採取方法** 明治以前は女人禁制であったこと、さらに険しい地形での労働で危険が多く女性は出来ない。イワオウギは、岩場ばかりでなく、緩傾斜の砂礫地にも自生していた。岩場以外の自生地は採取が容易なので、早くから焼畑民が採取し現金化していたので、絶え尽くしてしまっていた。だから、イワオウギ自生地は、人を容易に寄せつけない岩場や急傾斜地に限定されていたものと思う。

出かけるときはワラジ履き、オウギの結束用に使うスゲ縄（焼畑なので稲藁製の縄はできない）を腰に幾重にも巻きつけていく。背負い式の収納具タビノを担ぎ、オウギトビを持っていく。

オウギトビとは、鳶口の鉄部分が水鳥の鷲の嘴のように細く鋭利で約30cm、柄は片手で作業しやすい程の約30cm程の長さである。全体の形は、氷壁を登る際の登山用具アイスパイルに似ており、岩場で片手で操作しやすいようにハンディタイプである。

岩場・急傾斜地は登り易いが、降りにくい。したがって、作業は目的地岩場の最下部、すなわち壁の取付き地に最初に下り、そこから登りながら仕事をする。雨・霧で岩場が濡れると滑り易くなるので、雨天時には採取作業はしない。根が岩の割目（きぎくちばし）にしっかりとくいこんでいる時は、オウギトビを使用して採れなかったという。トビが入る位の幅のある割目・裂目に自生するオウギは、オウギトビを差し込んで作業するが、割目を開くと岩が崩れることになる。時として採取者自身が落下する事にも通じ、作

業は神経を使わなければならない。腕に力を入れて引き抜かれないときは、オウギの根元を縄で結び、その縄を腰紐に結んで、腰に力を入れて体全体の加重で壁から根を抜いた。ある程度量がたまると、腰に巻きつけて準備してあった縄を使って束にしてタビノに収納する。収納しきれない場合には束を下方の谷へ放り投げて落とす。岩場には、所々に岩棚や緩傾斜地があり、そこで休憩したり食事をとったりした。岩壁の下りは避け、なるべく遠回りになっても、樹木の生えている所を選んで木につながって下った。帰路には、落としたオウギの束を拾い集めてタビノに収納し、背負い運搬しながらオウギ小屋に戻った。

**4. 根の処理** 採取した根は、すぐタニヤ（水源地帯にある、少量の流れ水がある流れ）の水に漬けておき、付着している土を流れ落とす。根を平坦な自然石の上に置き、新しいワラジを履き、水をたっぷり含ませ、力をこめないで踏みながら外皮を外す。丁度良いのは、岩に腰かけて加重を軽くして踏み方法で、体重をかけ過ぎると根がつぶれてしまう。これまでの作業工程は、夕暮れ前の明るいうちにすませておく。夜間、小屋内でジロの火を灯りとして、

残っている外皮を小刀を使って丁寧に外す。処理した根は、ジロの上に張りめぐらした縄の干場で、火力と煙で乾燥させる。乾燥すると、かさは7割位に減ってしまう。

オウギ取りは、日中は危険な場所での神経を使っ  
ての採取作業、夜間は根の処理・乾燥作業と続き、  
現代風に表現すれば残業の連続という業務である。  
小屋自体が狭いから就寝時には足、体を十分に伸ば  
しきれずに疲れが残り、体力消耗が激しかった。だ  
から、帰ってくると家族に「目がへこんでいる」と  
言われるくらいの激務であった。

**5. 運搬・出荷** 小屋は、ただでさえ狭いのでオウギの貯えが増えてくると、体を横たえることが出来なくなる。加藤勇京家では、目分量で10貫位（約38kg）になると一度赤岩へ出した。これを「オウギ<sup>ヒト</sup>山した」と言った。「二山」できる年は殆どなく、「一<sup>ヒト</sup>山半」であった。加藤 岬家は飛騨側領域で採取したときは市ノ瀬までは遠いので白山室堂へ出して貯え、帰村時にまとめて担ぎ下ろした。久司仁吉氏に依頼すると、特別上手で30貫採ったことが一度あったという。

加藤勇京家では、金沢の仲買人や勝山の薬屋へ



写真6 白峰村赤岩，加藤勇京氏とオウギトビ



写真7 オウギトビと小刀で根の外皮をとりぞく所作

売った。現勝山市芳野の谷屋薬局山内博子氏（大正2年生、1975年調査）によると、白峰村より買った主な物は、オウギの外にはキハダの樹皮（黄柏）、コブシの花芽・蕾（辛夷）や熊の胃で、多くの人は常備薬と物々交換する商いであったという。加藤 岬家では、採取を他人に依頼するときは、日数は10日として1人1日米1升・味噌1合の分量、すなわち1人米1斗・味噌1升を前貸しし、採取量で清算する方式をとった。出荷先は金沢で、近江町の中栄草堂という薬問屋であった。

オウギ採りが焼畑民の生計にどのように関与したかについて、加藤勇京氏は19才の時砂防工事の日当賃金は1日25～30銭、オウギ採りにいくと1日50～70銭位の収入となり、おおまかに約2倍の稼ぎになったという。オウギの売買は重さでされていたが、「単位重量の価格」についての情報は聞き取れなかった。大正2年、河内領域内で国営砂防工事が始まる。それ以前は、現金収入の手だての少ない山間僻地では、数少ない貴重な稼ぎとなっていたようである。砂防工事は、焼畑民にとっては身近な場所に雇用の機会ができ、安定した現金収入を稼ぐ場として積極的に従事するようになり、それがオウギ採りや焼畑営農等に徐々に影響し始めることになる。

尾口村尾添の薬草採取について、金子有斐は『白嶽図解』で「尾添村の貧くて農業をなしがたき者は薬草を取事を業とする也。又春末雪内には熊を取てあきなふ者あり。尾添村より出る薬種は黄耆・黄蓮・桔梗・芍薬・大黄・葱冬・升麻・畑辛・黄柏・厚朴等也。（ルビは橘がつける）」と書いている。所得の低い階層が薬草採取をしているとしたのは偏見である。江戸時代文政期に尾添から出荷した生薬中、オウギはそれらの筆頭に位置付けされているから、量的にも出荷金額的にも大切な副収入となっていたものと推察する。升麻とはサラシナショウマの根である。葱冬については不明、畑辛とはカラシナの実かも知れない。

6. どこまで出かけて採っていたか イワオウギにせよタイツリオウギにせよ、何れもが高山植物である。高山植物の繁殖力・生長力は、平野部植物と比較すれば微々たるものであることは、誰しも承知していることであり、焼畑民も理解していたから畔田半存が訪れた時は、焼畑に移植して繁殖を試みていた。オウギ採取は根であるから、その採取を続けていけばオウギは文字通り根絶してしまう。だから最初の採取は、緩傾斜地、次に急傾斜地へ、さらに岩

場へと対象地の傾斜度は急角度となっていく。一方、水平的な隔たりでは最初には白峰村領域、次に他村の尾口村流域へ、さらに御前峰・剣ヶ峰等の分水嶺県境を越えて岐阜県飛騨側へと河内三ヶよりの距離は遠くなっていく。大正時代末期の採取地は、垂直的険しさや河内三ヶよりの距離的隔たりは、極限に達していたのではないかと思う。

加藤喜八氏は、体験回数も少なく、湯ノ谷最源流のオモ谷以外いかなかった。一度早めに雪が降り、村より迎えにきてもらった。その時、オモ谷の最源流は他の谷と同じで地図にない滝が続き、迎えに来た者もオウギ採りも新雪が積もった滝横の岩場を降りるのが非常に危なく、生涯最も恐ろしい体験であったという。採取場所は、御手水鉢下部周辺である。

加藤勇京氏は白峰村領域ばかりでなく、尾口村や岐阜県飛騨側領域へ出むいていた。白峰村領域では、別当谷・湯ノ谷である。別当谷では源流右岸、真砂坂より黒ボコ岩にかけての斜面で、現在の観光新道周辺にあたる。湯ノ谷筋では、右岸では釈迦岳東側のアラレ壁と大倉、ここは熊の猟場でもある。左岸では弥陀ヶ原が谷に落ち込む鎧壁やカン倉で、湯ノ谷は苦勞の割に採取高が少なかった。尾口村領域では、中ノ川地獄谷左岸の玄徳壁周辺。飛騨側領域では、翠ヶ池を下った場所（北弥陀ヶ原か？）に小屋掛けし、剣ヶ峰東側で採った。翠ヶ池下のオウギ小屋は、地獄谷左岸の岩場にいく時にも基地とした。別山道の加賀側・飛騨側両方に崩れやすい壁があるが、祖父や父の体験的情報では苦勞の割に採取量が少なく、勇京氏は採りにいかなかった。

加藤 岬氏は、白峰村領域より飛騨側領域へ多く出かけていた。白峰村領域では、湯ノ谷の鎧壁とモングチ。モングチについては地形図上の具体的場所は未確認である。飛騨側にいく時は、翠ヶ池下に小屋掛けし、大谷・小谷（大谷とは大白水谷の加賀側地名と思われる）や転法輪の岩場で採った。年によっては白山室堂を基地にしていた時もあった。室堂を運搬時の中継地にしていた事は前述した。

採取地として中ノ川地獄谷に玄徳壁がある。この岩場では加藤勇京氏が採っている。河内ではオウギ採りを全然しない人も、この地名はオウギ採取中に墜落死した人物名をあてた事は知っている。このオウギ採取地玄徳壁にまつわる話の内容は、幾分個人差がある。林七蔵氏による伝説内容は次のようである。



河内の玄徳は、いつも先回りし皆を出し抜いてオウギを採っていたので、他の者より稼ぎが良かったが皆より好かれていなかった。いわゆる玄徳壁で単独でオウギを採っていた。玄徳は自分の力を過信していたこともあり他人が登れない壁で仕事をしていて、立往生してしまっただけで助けを求めた。平生業障がたたって誰も助けようとしなかった。玄徳は遂にオウギトビを放り投げ、「のいの(さようならの方言)」と叫んで地獄谷に飛びこんで死んでしまった。暫く谷に「のいの」という悲しい叫び声がこだましていた。彼が墜落死した壁を「玄徳壁」といい、オウギ採りは細心の注意力を払って仕事をする場所である。

加藤勇京氏の語る伝説内容は次のようで、林七蔵氏のものとは少し違っている。

河内の玄徳はオウギ採りの名人であった。いわゆる玄徳壁は岩がもろく非常に危険なので近寄れず、オウギが多く生えていた。玄徳は一人でその壁に登りオウギを採っていたが、登ることも下る

こともできなくなり助けを求めたが、険しいので助けに近寄ることができなかった。玄徳はあきらめて「のいの」と言い残して飛び降りて死んだ。玄徳壁とは、オウギ採りの名人が採取中に落ちて死んだ人物名をつけた壁である。この壁には、玄徳の亡霊がへばりついており、絶えず亡霊石が落ちるので危なく、オウギがたくさんあっても、上手な人しか採りにいかない。

玄徳壁の伝説は、墜落事件があったのはいつ頃かはともかく、河内の焼畑民が村境を超えた他村領域へ出むいていたことを物語っている。この玄徳壁は2万5千分の1地形図に標記する「ゾロ谷」の左岸から出合にかけての位置にあり、壁最高部は約1,550m、最低部は谷底部で約1,050mである。玄徳壁下流約1kmには、尾添夏至家の人が墜落した夏至の壁がある。1988・1993年の2回中ノ川をさかのぼった今村道往氏(小松ブルーベル山岳会)によれば、ゾロ谷出合には7月でも雪崩による残雪があり、割ともろい岩質の崩壊した巨岩が多かったという。夏至の

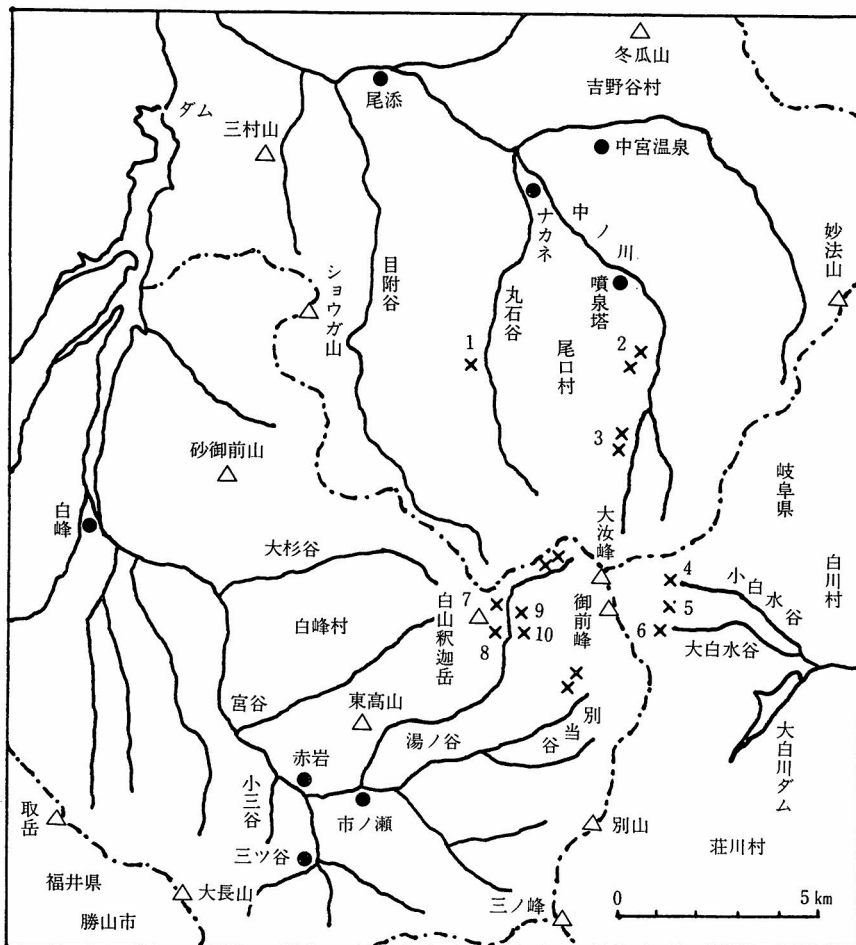


図2 主要オウギ採取地

- 1.オモリ谷 2.夏至の壁 3.玄徳壁 4.小谷 5.転法輪谷  
6.大谷 7.大倉 8.アラレ壁 9.カン倉 10.鎧壁

壁・玄徳壁は、共通して中ノ川左岸系統の山地にあり、オウギ採取中の焼畑民が墜落事故を起こしている。岩壁における墜落死の要因には二つ考えられる。一つは岩壁の急峻度が登る人の技術以上の険しさがある事、一つは岩質がもろく足場、手がかりが途中で崩れることである。どうも夏至の壁・玄徳壁は、二つの要因をもったオウギ自生地らしい。

加藤勇京・加藤 岨両氏の体験のように、河内の焼畑民にとっては、他村・他県との境界線は地図上にある単なる線で、生活上の区画領域を決めている線ではなかった。他村であれ、他県であれ境界線を全く無視して、高山植物を採取していた。

オウギ採取地の海拔高度は、加藤喜八氏の湯ノ谷源流域は約2,000m～2,450m、加藤勇京家の釈迦岳アラレ壁は約1,700～1,900m、黒ボコ岩付近は約2,000～2,300m、加藤 岨氏の剣ヶ峰東側は約2,000～2,500mである。これらの岩場は、スポーツ登山でクライマーが対象とする高度差のある垂直的岩壁ではないが、江戸時代から大正時代にかけて、なりわいのため尾添や河内の人々が命をかけた岩場である。このような意味で、白山の亜高山帯に位置する岩場は、近代登山の幕が明ける前、生業のため地元の人によって殆どが登られていたわけで、白山登山史を語る際、注目すべき事実として評価してもよいであろう。

### 生薬としてのオウギ

三浦(1967)によると、オウギは「黄耆」の漢字をあて、「有効成分未詳」、緩和強壯剤として用い、「利尿・排毒・盗汗・自汗等に有効」としている。オウギはそれ自体を薬品として使用することはなく、他の多くの生薬と配合して調合し、滋養強壯剤を作るのに重用する。その使用事例を出荷先の勝山市芳野の谷屋山内薬行に見るとオウギ(黄耆)はサフラン(泊芙蘭)、ニンジン(人參)、サンヤク(山薬)、チョウジ(丁子)、ショウキョウ(生姜)、キキョウ(桔梗)、オケラ(白朮)、トウヒ(橙皮)、ケイヒ(桂皮)等と調合し、商品名「清陽丹」という練薬を作っている。勿論オウギは、河内の人々が白山で採ったものである。滋養強壯剤としての効能は、身体の衰弱、五臓疲労、胃腸虚弱、食欲不振、産前産後、病中病後等をあげている。つまり、滋養強壯剤とは、なんにでも効く薬である。

金沢でも勝山と同じく滋養強壯剤として、中屋商店の「混元丹」でオウギは他の21味の生薬と共に、

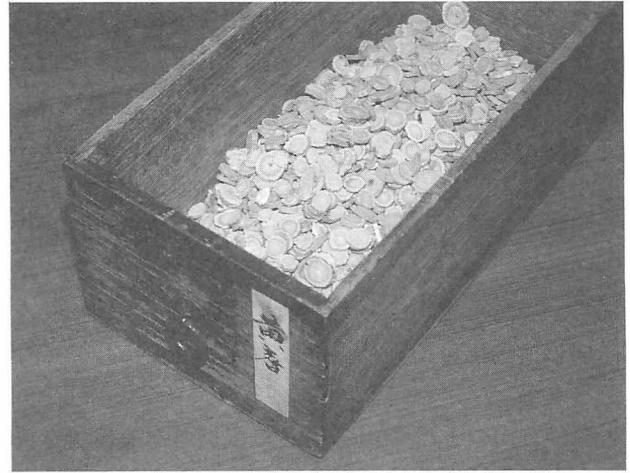


写真8 輪切りにした輸入オウギ(田中清龍堂にて)

また白尾谷本舗の「赤龍丹」では他の7味の生薬と共に調合されている。混元丹・赤龍丹は、金沢では共に著名で現在も市販されている。この二つの滋養強壯剤は、江戸時代加賀三味薬といわれた、「耆薬万葉丹」「紫雪」「鳥犀丹」と共に長い伝統をもつ代表的な和漢配合薬である。現在市販されていないオウギ使用の配合薬には、「安神散」「三輪振薬」がある。混元丹・赤龍丹・安神散・三輪振薬等が創られた当初は、地元の白山産のオウギを使っていた筈である。

現在流通しているオウギは、金沢の青龍堂田中薬局よりの教示では、栽培種のキバナオウギで中国・朝鮮半島からの輸入品である。乾燥した根を薄く輪切りにした半製品を輸入し、生薬として調合する時は粉末にして使用しているという。河内の焼畑民がオウギ採りを止めたのは、価格の安い輸入オウギが出回ったせいであろう。加藤 岨氏によれば、オウギ採りは毎年続けていくことはなく、価格の割高で良い年に採りにいったという事は、多分輸入オウギの影響があったことを指しているものと考えられる。白山で焼畑民がオウギ採取を止めた時期は、大正末期から昭和初期頃と推察する。

### あとがき

河内の焼畑民は、かつては積雪期、ブナ林に出むき、ブナを伐採し、除雪板コシキ・鍬の柄クワボウを作っていた。(橘, 1986)。今回の報告は、亜高山帯、それも他村・他県領域へ出むき、薬用高山植物を採取していた実態をまとめた。

二つの生業活動に共通するのは、仕事の最初に仮設小屋を作る事である。焼畑民は、「鉦一丁あれば小

屋ができる」と言い、現地に自生する樹木・草で材料を調達し、降雨・降雪に耐えることができる仮設小屋を、いとも簡単に完成させる技術をもっていた。この技術が、焼畑を管理する小屋、木製品を加工する小屋、オウギを採取する小屋等を作り、なりわいを営む基地を作り上げる。つまり、河内の焼畑民はこの技術を駆使し、ブナ帯の広葉樹や高山植物を活用し、現金を稼いでいた。補足すれば、高山植物を採取し換金化していた事例は、極めて少ないのでなからうか。

純粋な山村とは、山に生活の根拠となる住居を構え、山で作物を栽培し、食糧を作り、山でなりわいを立てている村を指すのではないか。白山直下の河内三ヶは、その起こりから廃絶する歴史的過程の殆どの期間を、純粋な山村として機能してきた、典型的な山村と言えよう。

調査にご協力いただいたオウギ採り体験者・情報提供者は本文中で紹介した方々である。尾口村尾添北村秀一氏、白峰村白峰長坂吉之助氏以外はすでに故人になられた。この聞き取り調査は20年前に実施したものを、今回まとめたものである。深く、故人のご冥福を祈るものである。

なお、この報告に付した写真の中、イワオウギについては清水建美氏より、中ノ川については今村道往氏より提供を受けた。また研究費の一部は、白山自然保護研究会の研究費を充当させてもらった。あわせて感謝の意を表する次第である。

## 補注

脱稿後、編集担当の野上達也氏より、『石川県天然記念物調査報告』第三輯(1927)・第五輯(1929)に、白山のイワオウギに関する情報記載があることの教示を受けた。この文献資料は貴重であり、幾ばくかの補注作業をしたいと思う。

第三輯には、「尋常平地ニ移セバ、ナホ長ク伸ビ、根ハ却テ瘦小トナル。高山自生ノモノハ其根茎ニ比スレバ甚ダ長大ニシテ、二三尺ニ及ブ」と書き、麓に移植した時の茎、根の生育状態を具体的に描写している。まえがきの項で、「焼畑移植については聞き取り調査で確認できなかった。」と位置付けした。しかし、第三輯の記述から判断すると、移植地について場所地名が書かれていないが、恒常的作付けもあったように感じられる。だから、河内産のオウギは、自生のものばかりでなく、移植で育成したものが含まれていた可能性が高い。

第五輯には、オウギ採取地について「白山御前峰ノ南方「ゾロ」谷頭部ニ昔へ黄著ヲ採リ乾燥シタトイフ、小屋場跡ト称スル所口碑ニ残レリ」と書き、さらに「今古書ニ載セラレタル白山方面ノ黄著採葉ノコト二三ヲ摘記スベシ」と続け、『白山遊覧図記』(以下図記と記す)記載の採取地として、志牟之

溪、中山、佐良佐良崩等を紹介している。つまり、新たにオウギ小屋設置場所一か所、採取地3か所が分かってきた。かつてゾロ谷源流部にあったオウギ小屋を現地地形図で説明すると、登山道平瀬道が大倉岳へ下っていく途中地、小屋建材を針葉樹より調達したとすれば、森林限界の最高地点と推察される。そして、この小屋で乾燥したのは、ゾロ谷源流で採取したオウギと考えるのが順当であろう。ゾロ谷とは、白水湖に流れこむ地獄谷の支谷である。

採取地を記述した『白山遊覧図記』は、金子有斐が天明5年(1785)の紀行を中心に漢文でまとめた十巻の書である。刊本は白山比咩神社が発行した『白山詣』(1933)の中に掲載されている。

採取地の志牟之溪は、『図記』巻之四雌溪の中にある。雌溪とは目附谷のことで、志牟之溪はシンの谷と読むのではない。漢文内容の要旨は「龍ヶ馬場の西、高く険しく人跡未踏、山間に泉根がある。危険で探訪できないがオウギ採取者だけが来ている。下流約三里の地に二重滝がある」の意味である。地形図では四塚山の西約1kmに二つの池がある。これが漢語でいう「泉根」でなからうか。目附谷は水源で北と南に二分する。北の支谷を仮に「北又」とすれば、二つの池・泉根は、北又右岸山地にある。シンの谷とは、四塚山を水源とする目附谷支谷・北又を指すのではなからうか。

採取地の中山は『図記』巻之四雌谷、左岸部分にある。漢文説明は「禿げた石山が天を突き、山頂は常に雲がかかっている。伝承では荒谷村の長八がオウギ採取のため、石山の頂を登りきわめたという」との意味である。左岸で、頂近くに岩場や禿地が存在するのは、鳴谷山と独立標高点1,591mのピーク(図記でいう龍頭山)がある。また、頂よりかなり下がった場所に禿部があるのはショウガ山である。『図記』の中山は、鳴谷・三本杉の次に書いてある。猟師集団によれば、中山は不明である。三本杉とは、魚止の滝上流右岸の緩傾斜地で、ショウガ山の東1.5kmの位置にあり、割と近いことを考えると、「石山突兀」と表現したのは、ショウガ山東斜面の禿部かも知れない。

採取地の佐良佐良崩は、『図記』巻之五中溪にある。中溪は中の川を指す。漢文は、「羅漢壁に続き、岩石は脆く崩れ易い。岩壁にオウギが生え、その品質は最上である」という内容である。図記では「清六原の下が羅漢壁で、続いて佐良佐良崩がある」としている。佐良は地名ゾロの漢語表現と思われる。猟師集団によると清六原とは、薬師山西方の独立標高点1699mを中心とした緩傾斜地で、その下にゾロという崩壊地とも岩場ともつかない崖があり、上流部を奥ゾロ、下流部をロゾロと命名している。奥ゾロ・ロゾロを図記では佐良佐良崩と記述したと思う。羅漢壁とは猟師集団によると噴泉塔対岸の右岸岩壁である。だから、右岸の羅漢壁と左岸の佐良佐良崩すなわちゾロが連続する筈がない。「羅漢壁が清六原の下にある」という表記は事実誤認である。採取者が事故死した夏至の壁の上流部に位置する。中の川左岸のオウギ自生地は、共通に脆く危険度は大きい、そこで採取されるオウギは上質であったことが分かった。

補注内容の要約を次に示した。



1. イワオウギは麓で移植栽培していたらしい。
2. 昭和初期，ゾロ谷源頭にオウギ小屋跡があり，岐阜県側ゾロ谷で採取していたと思われる。
3. 尾口村東荒谷から目附谷源流山地へ採取に出むいていた（江戸時代天明期以前）。
4. 中の川左岸の奥ゾロ・ロゾロに自生するオウギは品質が良い。

#### 文 献

- 石川県（1927）石川県天然記念物調査報告第三輯（白山），232-233.
- 石川県（1929）石川県天然記念物調査報告第五輯（別山），47-49.
- 金子有斐（1785）白山遊覧図記，「白山詣（1933）」18・21・24，

- 白山比咩神社。
- 金子有斐（1824）白巖図解（和本），底本は石川県立図書館本。
- 畔田伴存（江戸時代文政期 1818～1824）白山草木志（和本），底本は金沢市立図書館本。
- 清水建美（1982）原色新日本高山植物図鑑Ⅰ，213-214，保育社。
- 清水建美・古池博（1992）白山植物目録「白山（白山総合学術書編集委員会編）」，182-215，北國新聞社。
- 白峰村村史編纂委員会（1959）白峰村史下巻，541，白峰村役場
- 高田保浄（1833）続白山紀行（和本），底本は国立史料館本。
- 梅 典雅（1996）白山・花ガイド，41，橋本確文堂。
- 橘 礼吉（1986）白山麓石川県白峰村河内のコシキ作り，石川県白山自然保護センター研究報告，13，65-77.
- 三浦孝次（1967）加賀藩の秘薬，石川県薬剤師協会。